
まぶしい人は嫌いです

ちゅんた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まぶしい人は嫌いです

【Nコード】

N5714Y

【作者名】

ちゅんた

【あらすじ】

なんともまぶしいイケメン野郎に懷かれてしまった、地味ライフ絶賛満喫中の安藤奈津。

「ナツ先輩!」

「話しかけるな!」

地味ライフを取り戻したい、突っ込み気質な彼女の日常生活のお話。

ここ最近の不満（前書き）

初投稿です。

軽い気持ちで読んで頂けるとうれしいです。

ここ最近の不満

自分で言うのもなんだけれど、私は地味女である。

肩より短い黒髪をちょこんと両サイドにみつあみにして、制服のスカート丈はいたって普通。

いや、膝上5センチくらいなので長めなほうだ。

特に親しい友人もなく、基本的にいつも一人行動をしている。

かといって、特にいじめられているわけではない。私のクラスは実にのんきな人たちばかりで、普通に話もするし挨拶だってかわす仲だ。ただ特別に仲がいい人がいないだけ。

ちなみに私はそんな生活を、とーっても満喫している。

私は目立つこと・面倒くさいことがなにより嫌いだ。地味で友達がいない今の生活はとつてもラクですごく最高。

そんな私の生活は単調である。部活も委員会も所属していない私は、学校が終われば徒歩10分の場所にある家へとまっすぐ直帰する。

そして家の隣にある「セボンヌ安藤」という名の喫茶店への扉をあける。

「おじいさんただいま」

「奈津おかえり」

コーヒー豆を挽いている香りをかきながら、私は制服のジャケットを裏部屋へ放り投げエプロンを身につけた。

毎日、私のおじいさんが経営している喫茶店を手伝っているのだ。（ちゃんと給料はもらう）。

「今日、一人もお客さんいないね」

「そろそろ混みだすんじゃないかな」

おいおい、おじいさん。

意味深な発言じゃないですか。

そう思った矢先のことだ。

喫茶店の扉がバーンと勢いよく開け放たれた。

「ナツ先輩！ひどいじゃないですか！なんでいつもいつも先に帰っちゃうんですか！今日俺バイトだって知ってるでしょ！？」

出たな。私の平穏を乱す不埒な輩め。

こいつはまきはらたくみ榎原工。私の学校の1学年下の後輩だ。

「知らないけど。あんたのシフトなんて」

「店長！ナツ先輩の部屋にシフト置いといてって言ったじゃないですか！」

「ごめん、コピー機の使い方わからなくて」

おい、おじいさんを使うんじゃない。

「もうっ！じゃあ今から言うから覚えてください。今月は月・火・木・土なんで、月・火・木は一緒に帰りましょうね」

「知らない、その情報」あんたの後ろにいるお嬢さんがたが思いつきりメモとってますよ。ていうか、今日もどんだけ連れてきてんだ。おじいさんは大喜びだけど（売上の）、私としてはうんざりだ。だって、榎原目当てのお客さんって若い女の子ばかりで、黄色い声がそこらじゅうにあふれるんだもん。うるさくてしょうがない。

栗色のさらさらな髪に、すらりとした細身の体。ぱちつとした大きな瞳にシャープな小顔。そんでもって人懐っこい爽やかな性格。100人中100人が認める、嫌みのないイケメン野郎だ。榎原がバイトの日には若いお嬢さん方で埋め尽くされることになる。

はーあ、私はこんなまぶしい生き物とは関わりたくないんですよ。人目も気にせず堂々と話しかけられると目立ってしょうがないんですよ。

しかも、よりによってこいつ人懐っこさ120%なんだよな。こんな地味女放つといてほしいんだけど・・・。

「ナツ先輩、ぼーっとしてないで仕事してください」

いつのまにやら仕事モードへ突入していた槇原に叱られた。ちくしよう。

ついでに、おしゃれ度0%の真っ白エプロンを着こなすその感じにすら「ちくしよう」と言いたい。

「あんたが全部注文とりな」

「ひどっ」

「うっさい」

お嬢さん方の注文を私がとったら、恨まれるっての。決して叱られた腹いせではないのであしからず。

「おじいさん、やっぱりあいつクビにしようよ」「マキ君、いい子じゃないか」

はあ・・・この様子じゃ奴とは当分縁切れそうにもない。なんとか今までの地味生活を死守しなければ。はーあ、めんどくさい・・・。

おびやかされる学校生活（前書き）

クラスメイトには敬語な主人公。

おびやかされる学校生活

地味ライフにおいて大事なこと。

遅刻などという目立つ行為は行わないのが鉄板である。

なので遅刻するかもなどというスリルとは無縁でいられるように、
常々余裕をもって登校するようにしている。

「安藤さん、おはよ」

いつものように少し早めに登校した私を、前の席の高橋さんが待ち構えていた。

いつも挨拶をかわす仲だけでも、今日は体を後ろに向けている。

つまり私と話す気まんまん体勢をとっている。さらには、その表情がなぜかにやついている。

「高橋さん、おはよう……どうかしました？」

私が席に座るやいなや、高橋さんは身をのりだしてきた。

「安藤さんって榎原くんと仲いいの？」「イエエまったくですが」

なんだって!?

内心、目ん玉が飛び出るほどの衝撃を感じたが、私はかろうじて表情を崩さずにいることに成功した。自分ナイス。

「えー、じゃあなんでだろ？」

「……何の話ですか？」

「昨日安藤さんが帰った後に榎原くんが来てさあ、」安藤奈津さん
「いますか？」って聞かれたんだよねえ。だから仲いいんだって思

「つただけど．．」

「人違いではナイデショウカ。私はそんな人知りません。まったく知りませんが」

「でもフルネームで呼んでたけど。それに何回か来てるみたいだし。クラスの子も何人が話しかけられたって騒いでたもん」あいつ．．．そんなことしてやがったのか！

学校でそんなことしたら私まで目立つちまうだろうがぁ！

「おまえ槇原と仲いいの？俺に紹介してくんね！？」

急に話に割り込まれたので、声の主を見ると隣の席の山中君が登校なさったようだ。

「山中おはよ」

「おいーす。つか高橋足とじろよ。パンツ見えてんぞ」

「朝から盛るのやめてくんない？」

高橋さんに何か言いたそうな表情をしつつも、はあっとため息をついて話を終わらせました。そう、山中くんはやられキャラなのだ。そんな彼は今はなかったかのように再び私へと向き直ると、不思議そうに眉をしかめた。

「．．．なぜ、俺をそんな目で見る」「山中君がBLだということとを、さらっと告白したことに驚いています」

「はあ！？ちつげーよ、なんでだよ！つか、そんなこと告白した覚えねーよ！」

「さつき槇原くん紹介してくれって言ったから、好きだと思ったんじゃない？」

高橋さんのアシストにうなづきながら、私はあわてふためく山中君

を生ぬるい目で見つめます。

「ばっか、お前！そういう意味じゃねーよ！サッカー部に勧誘するためだよ！」

なんだ。そうでしたか。

ち、つまらん。

「すみませんが私と槇原工とやらは、全くの無関係の赤の他人なので紹介することはできません。ちなみに彼が探しているのは、どこかのクラスの同性同名の女子ではないかと思えます。クラスを間違えるなんてバカな奴ですね、まったく」

私はこれでシラをきりとおします。

そして学校では奴の視界に入らないように、より一層注意深く行動しようと心に決めた。

遭遇

なんということでしょう。

今朝氣を引き締めたばかりだというのに。

一日の授業を終えて、さっそうと帰ろうとしていたところを榎原に捕まってしまった。しかも校門の前という、かなり危険な場所で。

「おいコラ、離せ」

「ナツ先輩、今日こそは一緒に帰れますね」

人の話を聞いちゃいない榎原は、それはそれはまぶしい笑顔を向けてくる。

がっちりと私の腕を掴みながら。

ちくしょう。

もし今日も放課後迎えに来たら嫌だなと思って、担任の話が終わったと同時に飛び出してきたっていうのに逆にそれがアダとなったようだ。

6時間目が体育の授業だったらしい奴と、下駄箱でばったりとはち合わせてしまうとは思わなんだ。しかも校門まで追いかけてくるのは。

何が一番腹立つって、あずき色のダサイジャージを着こなしているあたりだ。

こんな今時珍しい芋ジャージが似合うのなんて、私ぐらいなのに！

「着替えてくるんで、ちょっと待っててください」

「ごめんこうむる」

「だったら俺のクラスまで一緒に来てください」

「勘弁してください」

「もー！俺にジャージで帰れって言っんですか？」

「手を離せって言っただよ！ついでに一緒に帰るといふ選択肢を捨ててくれと言いたい」

「じゃ、俺のクラス行きましようか」

「待てええ！なにが『じゃ、』だ！」

私の腕を掴みながら強引に教室へ行こうとする奴に対して、足をふんばって抵抗する。さっきからチラチラ人に見られてるのが気になっしょうがない。

これだから嫌なんだ。

まぶしい人間と一緒にいると、校門にいただけでも目立ってしまう。放課後の校門なのだから、これからあつという間に人も増えるだろう。

こうなったら奴の気をそらして、隙を見て逃げよう。

「ナツ先輩、おとなしくついてきてくださいよ」

「やだ」

「すぐ着替え終わりますから」

「やだ」

「こう見えても俺着替えめっちゃ早いんすよ」

「やだ」

「ナツ先輩？」

「やだ」

「ちよっと、生返事してるでしょ！」

あ、奴の気をそらす方法を考えてたせいで生返事してたのバレた。

ぶつと頬を膨らまして拗ねる榎原。くそ！

イケメンでやつは、なんでもサマにしゃがる！

ふくれつつらを味方にできる男なんて小学校低学年までだぞ！

腹立つわ、本当に。

「とりあえず腕離してみようか」

「やだ」

「一瞬でいいからさ」

「やだ」

「オイ」

「やだ」

「『やだ』返しすんな！さっきの生返事のこと根にもってんな、お前！」

なにコイツ。子供か！

「もー！なんでそんなに一緒に帰りたがるかなあ？」

「だって、同じとこ行くんだから別々に帰るほうが不自然ですよ」

むしろあんたと私が一緒に歩いてるほうが不自然ですから。

「それにせつかく知り合っただからナツ先輩ともっと仲良くなりたいですもん！それにはまず、じっくり話しながら下校するのが一番ですよ」

はい、出ました。

人懐っこさ120%！

うんまあ、悪い奴じゃないってことは分かってる。

むしろ、こんな地味な私と仲良くなりたいと言ってくれるなんて良い奴だ。

しかし申し訳ないが、まぶしい人種である君とは仲良くなれない。私の願いは、静かに地味ライフ送りたいということなのだよ。

君と関わったら、まわりの人の好奇心な視線にさらされてしまうのだよ。

例えば「何あいつ。地味女のくせに身の程知らず！」的な女子の怖い視線とかね！

さらに言えば、なにげにうざいところ（&しつこいところ）も仲良くなれない原因だ。

私はイケメンっぷりを見せつけられるとイラッとする性質である。どうやら私は世の中の女子とはまったく方向性のちがう女子のようだ。

「分かった、分かったよ。待ってるから。だから離して？腕痛いんだよ」

後半、多少演技してみた。

すると槇原はごめんなさいと言いながら力を緩めた。
今だ！

体育でも見せたことのないスタートダッシュを決めてやった。

なにやら奴が「あー！」とか言ってる声が聞こえたが、逃げたもん勝ちだ。

後で何か言われるだろうなと思いつつも、とりあえず良しとする。

・・・ちなみにその後。

喫茶店でのバイト中、ずっと文句を言われ続けました。やっぱりうざい。

兄、登場（前書き）

今回つっこみまくりの主人公

兄、登場

今日はまったく最高の一日だった。

金曜日は私の大好きな曜日である。

嫌いな体育も数学もないし、毎週楽しみにしているドラマがある。そしてなんととっても喫茶店が平和（槇原がいないから静か）だ。さらにさらに今日は学校で槇原を一度たりとも見かけなかったのだ、こそこそと逃げ惑う（地味に疲れる）ことをしなくて済んだ！
よって、私はなんとも最高に機嫌がいいのだ。

小粋に鼻歌を奏でながら、おじいさんと一緒に店を閉めて我が家へと向かう。

さーて昨日からじっくり煮込んで寝かせてあるカレーを食べよう。さぞ美味しいのでしょうな。実に楽しみだ。
上機嫌でリビングの扉を開ける。

・・・色々とありえない光景が広がっていた。

「あ、ナツせんぱーい！おかえりなさい」

ありえないその？。

槇原が家の中にいた。

ありえないその？。

めったに家にいない兄が、槇原とテーブルをはさんで座っている。

そしてありえないその？！

ふたりでカレー食ってる！

え、それ昨日から煮込んで楽しみにしていた、これから私の胃に収

まるはずのカレーだよな！？なに食ってんの！なに勝手に食ってんの！！

「春・・と、マキくんじゃないか。どうしたんだい。めずらしい」

おじいさん。

めずらしいとかいうレベルじゃないからコレ。

確かに兄が家にいるのはめずらしいけども。

槇原に関しては突っ込むべきでしょう。

「二人は知り合いだったのかい？」

「いや、初対面」

おい！

なんで初対面の二人が仲良くカレー食ってんだよ！

「なんかコイツ怪しかったから、これから尋問しようと思ってたところ」

おい！

尋問って！しかもそんな奴にまずメシを食わすな！

・・とりあえず、兄は意味わからん人だから無視しよう。

「槇原、あんた怪しい行動って、なにしてたわけ？」

「えー別に怪しいことなんてしてませんよう。家の前で待ち伏せしてただけです」

「じゅうぶん怪しい」

「失礼な！ナツ先輩にお願いがあって待ってただけです」

・・お願いだと？

聞きたくねー。絶対かなえてやりたくねー。

でも、気にはなるから一応聞いてみよう。

「あのですね英語教えてください。月曜にテストがあつて、赤点とつたら1週間補習になっちゃうんです」

「え、やだ」

「即答しないでくださいよ！言っておきますけど、俺が補習になつて困るのはナツ先輩のほうですからね。俺、バイト来れなくなっちゃうんですよ」

ちつとも困りませんが。むしろ願つたり叶つたりって感じですが。ていうかなぜ上から目線なんだコイツは。

「奈津、勉強ぐらい見てあげたらいいじゃないか」

おじいさん。

きつとあなたは売上の事を考えているのでしょうが、私は嫌です。

「・・・コイツ、何者？」

急になんだ、兄よ。

いまさら。そして思いつき話の途中でしょうが。

まあいい。いちいち兄に付き合つてたら日が暮れるので再び無視しよう。

「彼は榎原工くん。喫茶店のバイトをしてくれてる子だよ。それでこつちが奈津の兄で春。マキ君は奈津と同じ学校だから春の後輩でもあるね。」

私と違って、おじいさんはきちんと二人の橋渡しをしてあげた。やさしいな、まったく。

「3年生のハルさん！ナツ先輩のお兄さんだったんですか？はじめまして」

榎原よ、にこにこ挨拶をしているけども。

君はもう少しでこの人に尋問をされるところであつたのだよ。

「マキ君、春のこと知ってるのかい？」

「めったに学校来ないけどハルさん有名ですもん。かつこいこいつてクラスの女子が騒いでました」

そう、実は我が兄もまぶしい人種なのである。

どちらかというと女っぽい顔立ちで華奢なタイプだが、地味に筋肉ついてたり背が高いので立派なイケメンに属している。

基本的に無表情（実はぼんやりしているだけ）なところや、黒髪なうえに黒づくめの服装を好んで着ているあたりが神秘的に見えるように、イケメンぷりに拍車をかけているようだ。

余談だが、そんな兄は何をかくそう不良である。

私としてはこんな意味不明なぼんやり男が不良だなんてやってけねーだろと思うのだが、一応そういう仲間とつるんでいるから不良の括りに入れている。ていうか学校めったに行かないくせに、噂になつてゐるってどういうことだよ。

もうひとり腹立つ人、身近に発見。

噂のハルさんと私が、兄妹だということをバレないようにしなければ。

「こいつ電柱に隠れてこそこそしてたから、ナツのストーカーだと

思ってた」

兄よ。よくストーカーだと思った奴を家の中へ入れたな。

「あんた、なにも電柱でコソコソしなくても・・・」

「だってナツ先輩、逃げるじゃないですか」

うう。

否定できない。

「無理やり家の中に押し入ってやろうと思って待ち伏せしました。」

「

それはもはやストーカーと言っても間違いではないと思う。

おじいさん、目を覚ましてください。

彼はストーカー候補生ですよ。

被害者である私が、何故勉強なんぞ見てやらにやいかんのですか。そう訴えようとしたものの、おじいさんは既にいなくなっていた。

「・・・兄ちゃん、おじいさんは？」

「風呂」

「くそう、言い逃げか・・・。しょうがない、ただし1時間だけだからね。9時から見たいドラマあるんだから！」

「わーい！ナツ先輩の部屋楽しみ〜！」

はあ、最後の最後でどんでん返しをくらってしまった。せつかくいい一日だったと思ったのになあ・・・ちえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5714y/>

まぶしい人は嫌いです

2011年11月21日16時31分発行